

---

# 年上の女と年下の男

小田原アキラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

年上の女と年下の男

### 【Nコード】

N3857A

### 【作者名】

小田原アキラ

### 【あらすじ】

バレンタインデー直前に別れを告げられたアユは、酒に酔って見知らぬ男と一夜を過ごす。数日後見知らぬ相手と会うことになり、アユはその男、一に振り回されるはめになる。年上が好みのアユが少しずつ一の魅力に惹かれていくお話です。

「わ、別れる？」

思わず聞き返してしまった。

「うん。好きなやつできたんだよね。この間のお見合いで一目惚れ。ていうか、俺もそろそろ身を固めないといけないからさ、いつまでも遊んでられないし、その人と結婚しようと思ってるんだよ」

それ、クリスマスの時にあたしにも言ってたよ。あたし結構本気にしてたのに。

「だから、今日で最後ってことにしてよ」

してよって、お前何様だよ。しかも、よりによってバレンタインデー前日だし。あたしが心を込めて作ろうと思って買いだめといったチョコたちはどうするんだよ。あたしの気なんて知らずに呑気に笑いやがって。どうせあたしはあんたにとって遊びだったんでしょね。

いろいろ突っ込んでやるかと思ったけど、最後の最後まで大人げない自分をさらけ出さなくなくて、爽やかに笑って彼の申し出を受け入れてやった。最悪だ。

帰り際、優しく抱きしめられてちゅつとすると手を振って別れた。もう二度と会わないだろうな。っていかもう二度と会いたくないし。

社会人のおっさんなんかと付き合うんじゃない。結局浮気されて、別れるはめになるんだもん。っていうかあたしってバレンタインデー前にばかり別れてる気がする。今の彼の前も社会人で結婚してない人だと思ってたらバレンタインデー前に突然結婚して、ことを暴露されて、不倫なんてごめんだから別れた。おかしいとは思ってた。クリスマスとか、お正月とか全然イベント時に限って一緒にいてくれなかったから。

あたしはいつでも本気だったんだけどなあ。恋って難しい。

さっきの彼も、あっさり別れたけど、本当に好きだったんだよ。

そう思うと涙が出てきた。でも道ばただし、いろいろむかつくしで気が付いたら居酒屋に入ってた。しかもいつも行ってるそこだ。店のおじさんの顔見たら滝のように涙が出て、周りのお客さんとか気にしないで泣きまくってた。

それで・・・本当にこんなこと初めてだ。お酒飲めるようになってから一か月なんだけど、絶対にすぐに酔うから飲まないようにいわれたのに、飲みまくって記憶ぶっ飛んじやって、気が付いたらベツトの上だ。

あきらかに、怪しい部屋だし。ドラマで見たことあるけど、本当マジでこういう部屋なんだ。初めて来た。確実にここ、ラブホだね。布団から出て自分の体を見る。それから横を。案の定、全く知らない男がいた。悲鳴を上げかけた口を手で塞ぐと、急いで部屋を出た。

心臓がすごい音をたててる。もう、最悪。なんでこんなことになってるんだよ。それから気付いたらお金払うの忘れていた。慌てて部屋に入って、ラブホがいくらかかるのか分からないから適当に三万だけ机に出して、出ていった。

どうなってんだ。もう、絶対お酒だけは飲まないよ。

数日後あたしの通う服飾の専門学校の友人たちは、あたしが別れた話を聞くと飲みにいこうと誘い出した。でも先日のこともあるって、あたしは丁寧に断り、代わりに学校でジュースやらを持ってパーティー感覚の飲み会をした。それから、あたしが彼氏にあげようと思ってたチョコの材料を買いだめしていたので、それで作ったお菓子を皆に配った。男には義理チョコ。女にも義理チョコ。でも愛情たっぷりのつもり。

数を合わせてきたつもりだったけど、二つだけ余ってしまった。一つはあたしが自分で食べて、もう一つはどうしようかと悩んでたら皆がジャイケンで争奪しはじめたのでほっとした。

「これで、このメンバーの中で付き合ってる人いなくなっただね」

ポテトを頬張りながら隣に座ったなっちゃんが言った。

「そうだな。でもこれはこれでいいんじゃない？　だって俺らってめちゃ忙しいし。これからはもっと大変だろ？」

「そうだよ。今年は就職活動とかあるもんね」

十八の麻生と香織があたしのチョコを食べながら言って、あたしに親指をたてたポーズを決めた。同時だったので思わず吹き出してしまった。

「二十歳か。なんか空しい・・・」

あたしが言っていると周りに笑われた。あたしは一年浪人していた。大学を受験しようと思っていたけど、途中でよく考えると大学に行ってもやりたいことがないのに気付いて専門学校を受験した。受験といつても書類審査で、勉強はほとんどしなかった。

でもこの学校に来て良かった。楽しいし、仲間もできた。

学校を後にするとあたしはなっちゃんとレストランに入った。一番仲のいい子なので、いっぱい話したいこともあったし、その店はそついった時にいつも選んでいたところだった。

「ねえ、入ったとこなんだけど違うお店に行かない？　あたし目つけてる子いるんだ」

なっちゃんの色恋話はあたしの恋愛の数よりずっと多い。でも熱しやすく冷めやすい質なので、一目惚れしても付き合うまでに発展することは少ない。

「いいよ」

それだけいうと、せっかく頼んだドリアを取り消してもらって店を出た。

夜の道をどんどん進んで、明るい繁華街に入っていく。あたしは夜あんまり歩かないからちょっと怖い。でもなっちゃんはすいすいと目的地まで足を運んでいくので、オドオドしていらなかった。なっちゃんに連れてこられた場所はお洒落な雰囲気のパールだった。お酒は飲まないと決意したばかりなので、入りづらかったがなっち

やんに手を引つ張られて無理矢理店の中に入れられた。中は以外にも広く、スーツを着たり美人の女の人がたくさんいた。確実にあたし一人場違いな気がして帰りたくなっただけ、なっちゃんは興奮ぎみにさっさと席に座った。

なっちゃんが狙っている子はこのウェイターらしい。数人が行ったり来たりしているのを見るが、あれも違う、これも違う、と唸っている。

「本当にいるの？　なんかさ、みんなカッコイイから同じ顔に見えるよね」

「そうかなあ。でも全然違うのよ。一目で分かるの」

そうなのか。でもあたし顔のいい人は苦手だな。なっちゃんは平気でカクテルを頼んだけどあたしは、ウーロン茶を頼んだ。バーに来てウーロン茶を注文するのは恥ずかしかったけど、もう二度とあんな思いはしたくないので仕方ない。

「あ、いたいた！　ほら見てあそこ」

振り向くとちょうど今入りましたという感じで、カウンターの奥から男の子が出てきた。数人のウェイターと話をしてからカウンターに立ち、お客と話をしている。

確かに、顔つきはかなり男前。さっきまでカッコ良く見えてたウェイター達が色褪せていくようだ。まるでモデルだな。

「マジカッコイイ。見てよ、あの笑顔！　紳士っぽいじゃない」

なっちゃんには悪いけど、あの手の顔って相当ちゃらい感じがする。結構遊んでるんだろっな。

「あたし声掛けてくるから待っててよ」

あたしを置き去りにしてなっちゃんはあるという間に、カウンターに行ってしまった。一人にされてしまうと、よけいに店の雰囲気になじめない自分が空しい。二十歳にもなってお酒も飲めないのかよ。という目で見られてる気さえする。

ため息を吐き出した瞬間、肩に手をおかれた。なっちゃんだと思つて振り返ると、スーツ姿のみ知らぬ人がいた。その人が結婚を隠

してあたしと付き合っていた人だと気付くまで少しだけ時間がかかった。

「あ、三島さん！」

別れた時、二度と会わないと誓った初めての男だ。

「偶然だね。こんなところで会うなんて。珍しいんじゃないの？」

あたしの肩から手をのけると、断りもせずになっちゃんが座っていたイスに腰掛けた。

「友達に連れてこられちゃったんです」

「そうなんだ。で、友達は？」

「あそこのカウンターに・・・？ あれ？ いない」

三島さんもわざわざ振り向いてなっちゃんがいなかったことを確認してくれた。でもその時に妙な笑顔を浮かべているのをあたしはしっかりと見ていた。

すつと伸びてきた手はあたしの手を握りしめた。その瞬間に鳥肌が立ったのはもう既に好きじゃないからだろうな。

「ねえ、今晚ヒマ？」

「ごめんなさい。三島さんとは、もう別れたじゃないですか。それに今日は友達も一緒なんです」

につこり笑って穏便に済ませてやろうと、丁寧に断ったつもりだが、三島さんはうつとりとした笑顔を向けてくる。

「本当に友達はあるのかな？ 一人できたんじゃないのか？」

「何いつてるんですか」

手を引こうとすると、思いつきり引つ張られた。顔が近付いていく。

「妻とは別れたんだよ。君さえ良かったら、よりを戻さないか？ やっぱり、君じゃないと満足できないよ」

耳元に息を吹きかけるように話すので、余計に肌がぞわぞわする。三島さんってこんなに気持ち悪い人だったのだろうか。あの頃は本気の気持ちだったから触れられるだけで赤面してたけど、こんなに気持ち悪いと感じるのはきつと、冷めてしまっているからだろうな。

今更寄りを戻そうなんて虫のいい話、受け入れるはずない。

今度はあたしが思いつきり手を引いた。でもビクともしなかった。

「ホント勘弁して下さい。あたしそんな気まったく無いですから」

「そうかな？」

「は？ そうかなってどの口がいつてるんだよ。」

「君っていつもそうだったじゃない。嫌々いいながら、結局受け入れてくれる。そうだろう？」

それは三島さんを好きだったときの話だし。今は全然ためだつての。

いいかげん腕を振払いたくて殴り掛かろうかと思つた瞬間、別の声が入った。

「すみません、お取り込み中申し訳ありませんが、そちらのお客さまのお連れ様が呼んでおりますので、ご案内させていただきたいのですが？」

ぱつと顔を上げてみるとなっちゃんが狙っているという、イケ面男がいた。驚いたのは三島さんも一緒だった。彼の顔や声には怒りが含まれていて、お客に対する態度かよ。というぐらい、恐ろしい顔をしていた。まさに鬼の面だね。

三島さんが気が弱い事をあたしは重々に知っていたので、これはラッキーだと思ひ手が緩んだところで身を引いてさつとウェイターの陰に隠れた。

「三島さん。本当にごめんなさい。もうあたしそんな気全然ないから」

それだけ言うと、何も言わなくなった三島さんをおいてウェイターの後についていった。振り向かなかつた。後ろから殴り掛かられたらどうしようかと思つたけど、しばらく進むと三島さんの姿は見えなくなった。そこでようやく胸を撫で下ろせた。

「あんたさ、本当にどうしようもない女だね」

突然言われて、はあ？と顔をあげた。

「別れた男だろ？ あんなしょうもない男に引つかかったり、酒飲



んで酔ってラブホに男連れ込んだりさあ……。ホント、最低だね」  
男の目は、鋭く、あたしは数日前の出来事思い出しながら、嫌な予感を巡らせた。隣のイケ面の口振りからすると、あの日あたしと一緒にいたのって……

「もしかして、あなた……。あの日一緒にいた人？」

「はあ？ あんたが誘って連れ込んだんだろ？ 覚えてないのか？」  
あたしは頬が赤くなるのを両手で押さえながら頷いた。深い深いため息が横から聞こえる。すっごい恥ずかしい。そういえば相手がいたんだよね。しかも置き去りにしていったし。

「そうだ、あの三万返すよ。普通割り勘だろ？ ラブホってそんなに高くなかったし」

そうなのか。相場が分からなかったから、適当においてたんだよね。でもないらないや。そう言おうとしたら、彼が笑顔になってある方向を指差した。その笑顔は視線の向こうに向けられてる。

「ほら、お友達が待ってるぜ」

肩を小突かれて前を見るとなっちゃんが手を振っていた。あたしが慌てて手を振ると、ほっとした顔つきになった。一番奥のカウンター。ここなら本当に三島さんお姿形、全然見えないや。

「じゃあ、十一時に俺あがるから、それまで待っててよ」

「は？ え、ちょっと！」

声を張り上げたけど、彼は聞く耳持たない状態で、さっさと行ってしまった。なっちゃんの隣に行くと、思いきり抱きつかれた。

「よかったあ。アユが絡まれているのは見えたんだけど、あたしじゃ助けにいけないかどうかと思ってたら、彼が行ってくれたんだよ。やっぱり紳士よね」

「……あの人、名前なんていうの？」

「斉藤一だつて。はじめくん。どうしたあ？ やっぱりアユも惚れたのか？」

「違つて」

そうじゃない。そうじゃなくて、一夜を共にしたからには、名前

くらい知っというやらないと失礼よね。大分怒ってたし。

ため息をつきながら、あたしはまたウーロン茶を注文した。なっちゃんに、助けてもらった時どうだった？とかいっぱい聞かれて答えながら時間を気にしている自分が、すでに彼のペースに巻き込まれていることにあたしは気付いていなかった。

十時半になっちゃんは帰ってしまった。ナンパだったのだろうか、美人のなっちゃんに二人の男が話しかけてきて、イケ面に相手にされなくなったなっちゃんはその二人と盛り上がった。それでそのままお持ち帰り状態で帰っちゃった。

あの二人、見事にあたしのこと無視してたなあ。そりゃあたし美人じゃないし、ブスってこともないと思うけど、目立った顔ではない。でも化粧とかバツチシきめてるんだけど、そんなになっちゃんが魅力的だったのかな。すごい落ち込む。

深いため息をつくとき、机の上に物が置かれる音がした。慌てて顔を上げるとイケ面の斉藤一がいた。机の上には水が置いてある。わざわざ持ってきてくれたんだ。

「もうちょつとだから、待ってるよ。暇だったら、あそこのカウンター来いよ」

気を使いつつも、なんかすっごい声が恐い。

「うん。そうさせて頂こうかな」

そろそろと立ち上がった、指差されたカウンターまで移動した。なんか落ち込んでる気分の時に一の顔を見ると余計に自分が情けなく見えてくる。しかも一の目が鋭くて、責められてる気分になってくる。

カウンターには一ともう一人、イケ面ウェイターがいる。その人があたしが持ってきたウーロン茶と水のグラスを見るとやっと笑った。馬鹿にされてるのが一目瞭然で腹が立った。

「お客さん、カクテルでも作りましょうか？ 俺うまいですよ」

この金髪チャラ男め。仕事中にいくつピースつけてるんだよ。つけすぎだつての。いろいろ言ってやりたいけど、後々面倒くさそうだし睨み付けながら、あたしは断った。

「じゃあ、ウーロン茶のおかわりは？」

まだ馬鹿にしたような笑顔をあたしに向けてる。でもあたしは負けずに笑顔を作って「いただきます」と言ってやった。それからすぐにウーロン茶をいただいたけど、素直に受け取る気分になれなかった。

「お客さん怒ってる？」

「怒ってなんていません。それより失礼ですよ、あなたもあの斉藤一とかいう人も」

「そうかな？ でも気付いてるんじゃないの。場違いだつてさ」

カチンと来た。あたしがここに来てから気にしてることに、あっさり言いやがって。もう帰りたい。

「そろそろあいつあがる頃だし、店の裏回った方がいいよ」

あたしは勢い良く立ち上がった。それからまた睨み付けて、店を出た。なんなんだあいつは。本当にこの店の人って、お客に対してのマナーが悪いよ。泣きたくなってきたけど、あたしは急いで店の裏と思われるところに回った。時間は十一時を回ったばかりだ。裏にはゴミとかが並んで、勝手口っぽいドアがあった。そこまで行くと数人の男がタバコを吸って立っているのが見えた。行きづらい。と思っていいたら、勝手口が開いて中からあたしを呼びつけたイケ面が出てきた。

あたしの姿に気付く前にタバコをふかしてる男二人に挨拶して、あたしの方に駆け寄ってきた。ウェイター姿と違って、若さを感じるその姿にあたしは一瞬見惚れてしまった。

「これ、三万」

あたしの胸元に押し付けるように黄色の封筒を出した。あたしは落とさないように受け取ると、中身を確認した。

「俺が払っとくからいいよ。女に払わしたくないし。それよりあの夜のこと、あんた覚えてないの？」

あの夜。あたしすごい酔っぱらってたからなあ。

「覚えてない」

「だらうな。じゃあ、俺の名前も覚えてないんだろ？」

「さつき、なつちやに聞いたから分かるけど、斉藤一でしょ？」

そうかぁ。と言って一は重いため息をついた。それからあたしの頭に手をのせた。そうされて改めて気付いたけど、こいつ背が高い。あたしこれでも160以上の身長持つてるんだけど、180以上はありそうだ。

「じゃあ、あの夜のことどう思ってるの？」

言うとすぐに手をどけた。

「あなたに不快な思いさせたんなら、謝りたいんだけど・・・初っ端からあたしに対して馬鹿にしてる感じだから、謝りたくないんだけど」

生意気なこと言ってるな。更に怒らせちゃってるかもな。でも一は表情を変えずにあたしの方に手を出した。

「もういいや。携帯だして」

は？と思いつつ、あたしは自分の携帯を上着のポケットから出して差し出した。勢いに乗ったというか、思わずというか、やってしまったと気付いたら携帯を返された。

「何したの？」

「俺の携帯番号入れといたから、寂しくなったら連絡してよ。むしろ俺からするかも」

なんていいながら、あたしの腕を握った。今の言葉は、どうとったらいいんだろうか。混乱する。

「離してよ。あたし、あの夜のことはいいい思い出って思っとくから、これも返す。もう会わない方がいいよ」

思いきって彼を突き飛ばした。それから封筒を投げ付けて、あたしは夜の街に飛び出していった。歩いてるんだけど、一は追いかけてこなかった。それがよかった。なんだか、会ってはいけない気がしたから。好きになってもいけない。

一緒にいると変になる。あの夜に記憶がすつとんでしまったのはお酒のせいだけじゃないのかもしれない。あたしきつと重大なことを忘れてるんだ。そして彼はそれを覚えてる。思い出さない方がいい

いことなんだよ。そんな気がした。

携帯に入れられた番号は消した。もしかしたら掛かってくるかもしれないと思ってたけど、全然掛かってくる気配がなかった。あれから数カ月が過ぎていった。もう一もあたしとの夜を思い出しにしているんだろうな。あたしのこと、早く忘れてそう。

もう二度と会わないと思ってたけど、次に出会ったのはあたしの専門学校帰りの電車の中だった。あの顔を忘れるのは相当難しかったみたいで、電車の中で一目見るだけですぐに分かった。あっちもすぐにあたしに気付いた。

睨み付けるような目であたしを見ながら、近付いてくる。近付いてくるほどにあたしは遠ざかっていった。そうしているうちにいつの間にか一の方がスピードがまして、腕をつかまれた。そのまま振り向いたら、あたしは驚いて声を上げそうになった。

「な、なによあんた！ 高校生だったの！」

騙されたようだ。こいつの姿、もろ制服でそれがぴったしくる。

これって本当に男子高校生ってことだよな。一は鋭い目つきをやめないまま口元を歪ませた。

「そうだけど。でも俺も気付かなかったな。あんた高校生だと思ってたし」

高校生！ そんなに若くないですよ。むしろそんなに幼く見えるもんかな。あたしは立派な専門学生としてお洒落してるんだけど。最近の女子高生って大人っぽいからな。

「失礼ね」

腕を振って、繋がった部分を断った。電車の中で暴れるなんて恥ずかしい。そう思って、空いてる席に腰を下ろした。

「久しぶりだな。っていうか俺ずっと連絡待ってたんだけど。なんで電話してくれないんだよ」

「しないよ。もう会いたくないって言ってたでしょ」

「アユさんだったよね？」

あれ？何で名前知ってるんだ？

「名前、教えてくれたじゃない。あの最低の夜に。俺、見かけこんなんだけど声掛けられたらはいはいラブホに行くような男じゃないし。あんただから行ったんだけど、昨日の男とかみてたら何かシヨツクだったな」

一の顔からは鋭い瞳がなくなつて、穏やかな顔つきになつてた。その顔を見ると顔が赤くなつていくのが感じられて、あたしは顔を押しえた。

「携帯かしてよ。今度は俺があんたの番号覚えるからさ」

「え？ あたしの番号知ってるんじゃないの？」

一は少しだけ頬を赤くしてふくれた。その顔を見て笑いながら携帯を差し出した。

「しらねえよ。だからあんたの事探してたんだけど、高校生だともつてたからさ」

なんか可愛い。年下だからついそう思ってしまうのだろうか。でもこういう姿つて新鮮よね。あたし今まで社会人の人とかとばかり付き合つてきてたから、年下の男の子とこうやって一緒に話をしてるのは不思議な感じ。

返された携帯にはまた、一の番号を登録されてしまった。でももう消そうとは思わなかった。思い出さなければいい。あの夜のこと、忘れてしまえばいい。本当に嫌な予感がするから。

## 2（後書き）

二十歳の主人公の話です。私自身はそんな歳じゃないのですが、周りは二十歳が多いのでその人たちの経験をもとに作らせていただいています。

ここまで読んで下さってありがとうございます。早く更新できるようにがんばります。



あれからあたしの携帯の受信履歴には、一の名前がほとんどを占めるようになった。でもまったく会うことはない。というのもあたしが学校に行く時間と、一が学校に行く時間が全く違うからだ。時々電車の中でバッタリ会ったりするけど、たいして話もせず駅についてしまう。まあ無理してあたしの学校まで来たことがあったけど、なっちゃんに可愛がられて面白かったなあ。それに懲りたように、会えなかったりする日にはメールが来る。でも短くて単純なものばかりで日記みたいな感じた。今日の出来事を伝えられてあたしがその感想を送ってやるだけ。これはこれであたしは楽しんでるかもしれない。

昼間は高校に行つて、夜はバーで働く。バーなんて未成年は働けないはずだ。そう不思議に思つてそれを訪ねてみると、知り合いに頼んで働かせてもらつてるらしい。しかも一人暮らしだって聞いた。あたしと一緒にじゃ。でも、あたしはぶっちゃけお嬢だから、仕送りで生活してるんだけど、一は働いて稼いだ金で生活してるらしい。勤労高校生なんて苦労が多そうでかわいそうだ。

そんな話をしてやつたら、一は調子に乗つてあたしの手料理が食べたいって言い出した。以前に料理が趣味とかいう話をしたのを覚えてるんだろうけど、あたしは人を家に上げるのがあまり好きじゃなかった。断ろうと思つたんだけど、所持金が一万も無いという話を聞くと作つてやるしかないかなと妥協した。

二人になるのが嫌だったのでなっちゃんも誘った。最近気付きはじめたけど、あたしと一の関係って微妙なんだ。っていうか変。恋人同士みたいに、毎日連絡取り合つてる。でもどっちも何もいわない。ぶっちゃけ気持ち悪いけど、あたしは今みたいな関係は嫌じゃない。だって、あたしの一言一言に素直に驚いたり笑ったり怒ったりする顔を見れるのは、新鮮の反応だと思うから。恋人同士になる

なんて、考えられないな。だってあたし恋人というよりは一のことを弟ぐらいにしか見れてないんだよね。玩具みたいに遊べる弟。だからこのままがいいと思う。

一より早く来たなっちゃんはあたしに牛肉を差し出してくれた。

おかげでメニューが豪華なすき焼きになったので一が喜ぶだろうな、と話をしていると玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

多分一だ。玄関のドアを開けるとやっぱ一がいた。制服から着替えた姿で、急いできたのか頬が赤く染まっていた。それから後ろにはバーで働く一の先輩の、阿部さん。あたしに馬鹿にした笑顔を浮かべてきた人だ。あたしと一が携帯で連絡を取り合うようになってから何度かバーに足を運んだおかげで仲良くなったけど、今でもあたしはこの人が苦手だ。

「どうぞ、あがつてください」

良き家の主としてスリッパを並べてやる。でもあたしの住んでる部屋はたいして広くないからすぐ脱いじゃうんだけど。すでに準備が出来上がっていて、一と阿部さんが持ってきたお酒を机に並べるとなっちゃんが机の上にすき焼きの具がたっぷり入った鍋を持ってきた。

「うまそー。肉料理なんてめっちゃ久しぶり。ごぶさたしてます」

なぜか手を合わせてすき焼きに拝む今年高校二年生、受験街道まっしぐらな一は一人さっさと卵を割って肉をとろうとした。そこをあたしの手刀が飛んでいって一は小さく悲鳴を上げた。

「みんなで合唱してから」

そついうと阿部さんがゲラゲラ笑った。つられるように吹き出したなっちゃんを見ながら、急に恥ずかしくなって俯きながら席に着いた。

いただきます。と言いながら既に肉をつかんでいた一を睨んでいたけど、美味しそうに食べている姿を見ると頬が緩んだ。

「マジうまい！ アユさん自分で料理上手っていうだけあるね」

「そうかなー。肉ならたつぷりあるからジャンジャン食いなさいよ」  
バシッと背中をたたいてやると一は咳き込んでしまった。

「でも意外だなあ」

阿部さんの言葉にあたしは頬を引きつられそうになりながら笑った。

「あんたってトロそうなのに料理うまいんだね。奈津実ちゃんもそう思うでしょ」

なっちゃんは今口の中に含んだ肉をちぎるのに必死で話を聞いていなかったらしく、あたしと阿部さんを不思議そうな顔をして見ていた。なんか会話にオチがないって気まずい。

なんだかんだで盛り上がったことは盛り上がった食事は、酒に手を付けはじめたなっちゃんと阿部さんの勢いによって夜遅くまで続いた。なっちゃんは初めからあたしの家に泊まるつもりだったので酔っぱらうだけ酔っぱらってあたしに片づけを押し付けた。阿部さんも初めから一に送ってもらった気だったらしく、なっちゃんと張り合うように酔っぱらっていた。

あたしはもちろん、嫌な思い出のある一は一缶飲み終わるともうやめてしまった。なので片づけはあたしと一がすることになった。

「明日学校だね？ こんなに遅くなって、朝起きられるの？」

勤労高校生の遅刻を心配して聞いた見たけど一はにっこりとした笑顔で、大丈夫と言った。バイトでなれてるらしい。

「あんまり無理すんなよ。ホント、苦労してるよね。なんで一人暮らしなんてしてるのよ。高二でしょ？ まだまだ遊びたい盛りじゃん」

洗ったお皿を渡しながらそつと顔を覗き込んでやった。

「俺だつて遊んでるよ。それに今のバイトめっちゃ楽しいし、苦労してるなんて思っていないよ」

慣れた手つきでお皿を拭いていく。

「食器乾燥機かったら？ 金持ちなんですよ？」

「そうだね。あんまり家で食事することなかったからタイミングのがしてたんだ。思いきって買おうかな」

「そしたらまた食べにくるよ」

そうきたか。一はでかい鍋も雫を床にこぼすことなく拭き取っていく。洗い終わったお皿を食器棚に入れながら酒で酔っぱらってそのまま寝てしまった二人を眺めると、思わずため息が漏れた。さて、どうするか。

「うわ、阿部さんマジ爆睡じゃん」

いつの間にか背後に立っていた一が耳元で声を上げた。

「担いで帰れんの？」

みるみる表情が変わって、自信なさげな顔にかわった。阿部さんも大の男。起こせばどうにかなりそうだけど、一とは家が正反対の家にあるとかで送っていくには重すぎるだろう。

「自信ないけど、置いてくわけにいかねえし」

「いいよ。泊まらせてあげる。だからあんたはそろそろ帰んなさい」  
「待つて、待つて。阿部さん泊めるんなら、俺も泊めてもらってもいい？」

なぜそうなる。あたしは慌てて首を振った。

「駄目駄目！ 阿部さんはほら、酔っぱらってるから仕方ないのよ。そこまで送るし、そろそろね？」

追い出すような言い方だ。傷付いたような顔をして一はあたしを凝視した。どうしても二人になるのは避けたかった。一があたしを瞳に映すときの表情が、会う度に変わっていくのを知っているから。  
「わかった」

意外にも素直に返事が返ってきたのであたしも外に出る支度をした。といっても上着を羽織るだけなんだけど。

外は寒い。でも春に近付いているのが分かる。三月にはいったんだな。一と出会ってからすでに一か月以上が経ってる。今までずっと年上ばかりと遊んでたあたしが、弟みたいな一と出会えたのはどうしてなんだろう。最悪の出会いの中で、あたしが忘れてしまっ

た記憶を一はあたしに教えてくれない。思い出すのを待ってるみたい。でもあたしは思い出したいくない。

アパートから十分程度の駅まで行くといったけど、一は夜は危ないからと断った。アパートの下までいくと一が立ち止まった。

「マジな話さ、次はいつ会える？」

真面目な顔をするもんだからあたしはすぐに返事ができなかった。そしたら一は顔をうつむかせてあたしの手を握った。

「アユさんは、俺のこと迷惑がつてる？」

不安そうな声。

「全然。そんなこと思っていないよ。急にどうした？　悩みでもあるの？」

悩みなんてあるのか？　こうやって甘えてくるのを知ったのは、連絡を取り合うようになって初めて会うようになった時からだ。それまでは、顔はいいし、頭はそれなりにいい学校いつてるからいいと思うし、体力あるし、筋肉はしっかりついてるし、モデルみたいなスタイルだし。きっとモテると思っていた。今もそう思う。それにいつつも楽しそうで、悩みなんてなさそうなのに。

「悩み・・・悩みはあるけど、言えない。でも迷惑じゃないなら、会ってくれる？」

「いいよ。いつでも。また、メールしてよ」

「分かった。じゃあおやすみ」

一は握っていた手を引いてあたしのおでこにちゅつとキスをした。それからさつと歩き出して手を振った。あたしは何が起きたのか理解できないまま手を振っていた。

瞳に映る一の姿は弟という位置にしかないんだけど、一にとってあたしは恋愛の対象のようだ。そう確信できる、キスだった。

あたしの家を知ってから、一はメールもせずにあたしの帰りを待っていることが多くなった。どうしてあんなに寒い中で待つてるんだ？ と聞くと、おいしいご飯が食べたかったから。だと言うもんで、あたしは思わず吹き出してしまった。

初めは週に一回程度に食べに来ていた一は、バイトのない日だけここでご飯食べに来る気じゃないかと思うぐらい、頻繁に顔を見せるようになった。そして必ず晩飯を食べて、十一時には帰っていく。電車の時間があるので慌てて出ていくときもある。泊めてやってもいいんだけど、あきらかにあたしに恋愛感情を抱く一を泊めるのは貞操の危機を感じるのであたしからは言えない。

近頃は専門学校の課題に追われ、学校に遅くまでの残ることが多くなった。あたし以外にもいっぱい友達が残ってるんだけど、同じ方向のなっちゃんはや早いうちに終わらせてて、暗い道を怯えながら帰る日々が増えた。そういった時は、一が家の前で待っていないように、先にメールを入れて家に来ないように忠告しておく。

そんな春に近い夜のことだった。その日も夜遅くまで残り、友達と別れて帰っていた途中で後ろから迫る足音が聞こえた。近付いてくる足音はそのまま通り過ぎると思っていたら、一定の距離を保ったまま、あたしの後をついてきた。怖くなつて振り返ることもせず、駅からの長い道を歩いた。徐々に早歩きになり、足音が近付いてくるとあたしは走り出した。

街頭の明かりは弱々しいもので、アパートまでの近道を選んでしまつとそこはほぼ真っ暗な状態だ。しかも民家なんてなくて、閉まった店が並んでる。アパートまで後少しなのに。走りだしたはいいいけど、後ろの足音も走り出して追いかけるようになってしまった。

どうしてあたしの後を追ってるんだろう。でもこの時そんなことは考えられない。叫んでも誰も来てくれない。

足音の人の手があたしの肩をつかんだ。そのまま道に倒される。叫んで、蹴ったり叩いたりするけど、男の人っぽい手で押さえ込まれる。

もう駄目だ、犯される！

目をつむってから男の手が動かなくなった。それから低いうめき声が届いて、目を開けると一がいた。驚いた。でもほっとした。一がすごい勢いで男に殴り掛かって、男が低い呻き声を上げた。それから男が反撃し、それが見事に一の顎下に入って倒れてしまうと逃げ出した。

「はじめ！」

慌てて震える足を立ち上がらせて一に駆け寄った。頭をゆっくりと起こしながら殴られたところに手を触れる。うめき声を上げて、ゆっくり目を開けた。

「大丈夫？」

開口一番にそれを言われて、力一杯頷いた。それから涙が出そうになったので、抱きしめた。

「アユさんが無事で良かった」

手があたしの髪に触れる。その手を握って、笑った顔を向けると「ありがとう」といって涙を流してしまった。

「なんで、なんで、ここにいるの？」

「今日も寄らせてもらおうと思ってたんだ。時間が同じでよかった手、震えてる。怖かった？」

怖かった。でもこの時に一があたしのアパートに来ようとしてくれていたことに、とても感謝している。道の真ん中で、一に抱きしめられながら涙を流した。ずっとあたしの頭をなでて落ち着かせてくれた一は、弟ではなかった。ここがあたしの気持ちの切り替わった瞬間だったと思う。

その日から、なるべく帰りが遅くなるときは一に送ってもらうか、タクシーを使うようにした。もう二度と怖い思いはしたくなかったから。時にはなっちゃんが車で送ってくれることもあった。あたし

にも車の免許を取るように勧めるので、仕送りで貯めたお金が溜まったらしようかな。

春を迎えて、あたしは二年生になり、一は受験がはじまる高校三年になった。年が縮まったけど、またすぐに離れていく。たいしたことのない年の差。だけど気にしてしまうのは、あたしが徐々に一に惹かれ始めてるのかもしれない。

課題が終わって学校が短縮になる日、入り口のところの学生服が見えた。よく見ると、一が突っ立っていた。駆け寄る途中であたしに気が付き、一が手を振った。

「どうしたの？ 学校は？」

「今日から昼まで。アユさん、これから用事ある？」

「ないよ」

一はポケットから二枚のチケットを取り出した。それは近くにある遊園地のチケット。

「友達がスーパールの懸賞に当たったんだ。行かない？ 今日までなんだけど」

遊園地なんて一年ぶりだ。高校の卒業旅行に行ったきり、行つてない。

「行く！」

「じゃあ、早く行こう」

自然と一の手があたしの手と重なって、引っ張られる。後ろの方から、友達の声が聞こえたけど、振り返ることもせずに走り出した。スカートにパンプスを履いてきたから、走りにくいけど時々後ろを気にする一の笑顔を見ると、嬉しくなってしまう。

駅に着き、四つの駅を乗り過すと、観覧車が見えてきた。小さな遊園地。服飾の専門学校に通いはじめ、一人暮らしをはじめめる頃から、一度は行ってみたいと思っていたけど、行く機会を逃してばかりいた。でも今日ようやく行くことができて良かった。

「俺、ここの遊園地初めてなんだよね」



電車から降りて、改札口を出ると一が言った。歩いて二十分。バスなら十分程度。

「あたしも。一って、この辺の人じゃないんだ。あたしも、違うんだけどね」

バスの時刻表を覗き込む。

「今の時間、全然バスないや。歩いて行こっか」

頷いて、歩きはじめる。観覧車がビルに見え隠れするけど、見える場所を探しながら歩いた。

「俺は海に近いところにすんでたんだ。実家はまだそこにあるんだけど、俺は追い出されちゃてるから戻れないんだよね。バーのバイトは親戚の人の紹介なんだ。親戚の人と俺の両親仲悪いから、俺に協力してくれてて・・・ってこんな事今話すことじゃねえよな」

ははつと笑い合つてすぐに見上げると、観覧車はすぐ目の前に迫っていた。小さくて、広くはない遊園地だ。でも幼い頃に来たことのある遊園地と似ていた。

中に入ってみると乗り物の少なさと、人の少なさが目立った。短くて迫力のなさそうなジェットコースターに急いで乗り込むと、他に乗る人がいなくて一番前に乗ることになった。

「うっわー！ ドキドキするなあ」

一はそう言いながら、頬を紅潮させて興奮気味だった。それはあたしも一緒に、絶叫系の乗り物が大好きなので早く発進して欲しかった。でもいざ動き出すと、体が浮いていく感じが気持ち悪くて、降りてすぐにトイレに駆け込むはめになった。

戻ってくるとベンチに一が座っていて、あたしを見て慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫？ そんなに早くなかったと思うけど」

「早さの問題じゃなくて、久しぶりで気分悪くなっただけ」

手で一の肩をおした。心配させて悪かったけど、あんまり近付かれなくなかった。

「じゃあ、メリーゴーランドは？ よけいしんどい？」

メリーゴーランドなんて、卒業旅行でも乗ってなかったなあ。

「いいね。乗ろうよ」

やっぱり誰も乗っていないメリーゴーランド。あたしと一は隣同士の馬に乗った。でもこれって動いているうちに離れていくんだよね。そう思いながら乗ってみる。

「うわあ、こんなのちっちゃい頃以来だよ。変な感じ。それにしても馬かたいなあ」

べしべし叩くと、空洞から聞こえる低い音がした。

「確かに。こんなに堅いと尻痛くなりそうだな」  
そうだろうね。

動き出したメリーゴーランドは案の定、あたしと一の距離を離し ていった。前に行く一は楽しそうに叫びながら、時々あたしの方を振り向いた。あたしは笑ってみせたけど、距離はなんだか悲しいほど、溝のように深まっていく気がして泣きそうになった。

今のあたしと一の距離は、まだまだ遠い。

外が真っ暗になりかけた頃、一は急にあたしの手を引っ張って恋人たちの定番ともいえる、観覧車にのせられた。観覧車は高く、綺麗に光っているし外の景色はとても素敵なものが見れるような予感がした。

「どこまで上がるかな？」

「さあね」

一が言っ てすぐに窓の外を見た。夜の観覧車は初めてだ。なんだから動悸が激しくなっ ていくのを感じる。

「飛行機から見る光っ て見たことある？ それぐらい、綺麗に見えるのかな」

「宝石みたいに見えるやつ？」

「そうそう。町のネオンっ てお金の無駄だと思っ てたけど、こういう時代だからこそ、綺麗に映るんだよね」

ふーん。とだけ言っ て関心なさそうにまた窓の外を見た。一はな

んだか緊張してるように見える。あたしと二人でいるからだとしたら、ちよつと笑えるな。

高いところまでできたけど、残念なことに飛行機から見る景色ほど美しくは映らなかった。思わずため息を吐くと一が笑った。そんなおかしいことしたかなあ？　と思っていると、一は観覧車を揺らしながらあたしの隣に座ってきた。おかげで、観覧車が傾いて、あたしは叫んでしまった。

「待って！　動くなら、動くっていつてよ！　これ一応バランスとってるんだから！」

「ごめん、ごめん。ね、俺からの一大決心聞いてくれる？」

一大決心？　気になるな。耳を寄せるようにいわれたので、顔を近付ける。すると一の手があたしの髪の毛に触れて引つ張られると頬にキスされた。驚いて身を引くと、真剣なまなざしがあった。

「アユさんのこと好きなんだ」

は？　と思っただけと言えなかった。ついに、ついに言われてしまったな。という感じだった。でもすぐに返事できなかった。あたしが持つ気持ちは、まだまだハッキリしないものだから今い返事しても中途半端なものになってしまう。言葉が詰まって、出て来れない。そうこう考えているうちに、観覧車は一周していた。

「降りようか」

その声も顔も、笑っていたけどきつと期待してるんだと思った。

返事をどうしようかと思っている間は、一と会うことがなかった。それでホッとしていたんだが、やっぱり返事をしなければいけない日はくる。だから必死に考えてるけど、何言ったらいいのか分かんなくなってきた、面倒になって、なっちゃんに打ち明けたら一緒に何故か飲み屋にいく話になっていた。

飲み屋はいつものところ。飲酒は禁じていたが、ここで思いきって解禁してみることに。苦い思い出のある飲み屋だけど、ある意味思いの出の場所だ。そういえばその話をなっちゃんにしていなかったと気付いたが、今更な気がして言えない。

「うわあ。飲みになんて久しぶり！　じゃんじゃん飲んじゃいまあす」

ジョッキ片手になっちゃんと乾杯をする。こういうのも久しぶり。なんのお祝いでもないのにテンション上がってジョッキをぶつけまくっちゃうんだよね。

「あんた付き合い悪かったもんね。飲み屋ついてくるけど、ウーロン茶、ジュースばつかでさ。お前は子供かって感じだったなあ」

「そのせつは、どうもすみません」

「いえいえ。で、返事の件だけど・・・一君焦ってないと思うしさ、じっくり考えたらいいと思うよ」

そうだろうなあ。あたしも分かっているんですよ。一があたしの返事を急かしてるんじゃないことも、時間いっぱい使って真剣に気持ちを考えることも。

「おじさん、きんぴらごぼう下さい。あと、焼酎！」

なっちゃんがカウンターからおじさんに声をかける。おじさんはニツコリ笑って返事をした。そういえば一と一夜を過ごしてしまった夜もおじさんに出会ってたんだよね。

おじさんはきんぴらと焼酎を出すと、あたしの方をじっと見た。

首を傾げてあたしもおじさんを見ていると、「あ！」と声を出した。  
「あんた随分前に酔っぱらってった女の子だね？」

隣のなっちゃんは驚いた顔をしてあたしを見ている。赤くなりながら、顔をうつむかせた。

「そうです……。あの時は、ご迷惑おかけしました」

「いやいや、あんたも大変だったんだねえ。ずっと彼氏の話ばかりして、どうにも忘れられなかったんだよなあ。あのにっちゃんは元気かい？」

にっちゃん？誰のこと？

「あの、にっちゃんって？」

「あの日、一緒に喋ってたよ。あんたと二人で酒飲みながらね。そのまま二人で店出ていったから、知り合いかなんかだと思ってただけだねえ」

それだけ言うとおじさんは常連のお客の来店の挨拶をし、席を案内していった。なっちゃんと目を合わせると、何の話？と首を傾げられた。「なんでもない」わけなかったけど、誰かに打ち明けるような話じゃないと思った。結局、なっちゃんも追求しなかった。気にはしてたみたいだけど。

それよりも、あの日のことを、おじさんは覚えてた。しかも知り合いみたいに喋ってたことは、あたしが一を引つ掛けたわけじゃないのよね。多分そういうことになると思う。

だんだんと思い出してきた。あの夜のこと。

あたしがおっちゃんと喋ってたら、一がきたんだ。一は誰かと飲んでたようだったけど、あたしの隣にわざわざ座って話をしたんだ。その話は、ほとんどがあたしの愚痴。彼氏の悪口とか、いい事ないなあとか。そんな話を一は黙って聞いていた。それからもう一件別の所行こうって、あたしが誘い出して、確かにもう一件行った。その後、記憶が曖昧になってきたけど、本当に酔っぱらってラブホに入った。

その後のこと、思い出してしまうと頭がパニックになりそうだ。

なっちゃんと話をしてるのに、お酒も飲んでるのに、何も感じ取れなくなった。笑ってる顔も、筋肉が勝手に動いてるだけで感情は動いてないようだ。

居酒屋を出て、一人で駅まで歩きながら考えた。

あの夜、ベットの上で一はあたしに言っていたんだ。観覧車の告白より、ずっと熱い言葉を口にしてたんだ。

『俺、まだ子供であんたを幸せにすることとか、約束できないけど、笑わせることはできると思うんだ。今見たいに、無理に笑ってるんじゃないくて、楽しんでるって顔させてあげられる。だから俺というよ』

それで、あたしは頷いてたね。だって何いつてるのかほとんど頭の中に入ってなかったんだもん。それでも、気付くのは遅くなったけど好きだったんだよね。好きだから、頷いてたし、今までこの気持ちに気付いたら駄目だと思ってたんだ。

観覧車での告白のときの複雑な気持ちも、きっとここにあったんだね。

店を出て、駅に向かおうとしていた足は自然と一のバイト先のバーへと向かっていった。自然な行動だと思った。もっと前に気付けば、こんなにウジウジしなくて良かったのに。と思うけど、気付いてしまったら、何かが壊れる気がしていた。

以前なっちゃんに何度も言われた言葉がある。あたしが求めている父親の面影は、今まで付き合ってきたスーツ姿の人たちに重ねているんだろって。そうだったかもしれない。でも必ず愛はあった。あたしからも相手からも、愛はあったはずだ。それでも短期間であつさり振られてしまうのは、あたしの瞳はスーツ姿の上に父親を浮かべているからだと思う。それっていけないことだし、傷付いちやうこともあるんだろね。あたしはなっちゃんに何度父親と重ねて見ていると、忠告されても聞き流していたけど、一と過ごした時間

はそういうものを打ち消していた。

甘えることが当たり前のようにだったけど、一といるときは自分が引っ張っていけないと思うところもあった。でもそういった場面であたしはいつも、父親というものからはなれていく自分が恐ろしかった。あの優しかった父はもういない。いなくなってしまうってから、随分時間が経って、母はふつきれて妹と暮らしているのに、自分だけが捕われたままだ。でも忘れちゃいけない。父親のぬくもりを忘れたくなかった。だから、ずっと思い出せずにいたんだと思う。

いっぱい考えてたけど、結局弱い心を持ってたってことなんだよね。今は、自分に正直になる。

バーはいつものように賑やかで華やかだ。女の人はおしゃれな格好で席に座って男たちに声をかけてる。あたしにはとても場違いな場所。でもバーカウンターでカクテルを作りながら客と話をしている阿部さんを見つけると、小走りで駆け寄って、カウンターに座った。

阿部さんはお客にカクテルを渡すと、あたしの方を見た。

「珍しいじゃん。一、呼んでようか？ 飛んでやってくると思うけど」

阿部さんは既に知っているらしい。あたしは頬を押さえながら首を振った。すると阿部さんは大きなため息をはいて、あたしに耳を寄せるように手招きした。

「なに？」

「返事に困ってんだろ？ 俺は一の奴、やめといた方がいいと思うけどな」

そういうとあたしは阿部さんから少し離れて、睨むように阿部さんを見た。

「どういうこと？」

阿部さんはカクテル表を出した。せつかくだから何か作りながら話そうということだった。あたしちょっとお酒臭かったかな。あたしは適当に選んだけど、阿部さんにはっこり笑って手際良くカクテ

ルを作りはじめた。

「あいつ、彼女いるんだよ」

「はあ？と言うところだったが、阿部さんは続けた。

「もう三年以上つきあつてると思うよ。でも別れたりくつついたり。今もそうだな。別れてるわけじゃないが、会つたりしてにだらうな。あいつこういう時期はいつもそうなんだよ。彼女とうまくいかないう時について、他の女と浮気するんだよ。あんたも、そうだよ。結局、彼女とより戻したら浮気の相手は一が振るんだ。今、もしいい方向に話が進もうとしてるんなら、やめといた方がいい。後で泣くのはあんただからな」

出来上がったカクテルは、赤い色をしていた。でもせつかく暖まった心はこのカクテルのような色はしていなかった。真つ青に、染まつてしまい、悲しみの色をあらわしていると思う。

シヨック。そうシヨックだ

「あいつのあんたに対する気持ちは本物だけど、彼女はもつと大切なはずだ。あいつ母親を重ねて見てるんだ。面影とか、一つ一つの仕草が似てるんだって話してたことあつた。母親に捨てられたあいつにとって、彼女は重要な存在で、離れられないんだ。それは彼女の方も一緒でさ。だから、あいつは無意識に寂しさをうめるために女を求めてるだけ。本気になる前に、やめたほうがいい」

そうか、一もあたしと一緒になんだ。でも違うのは、あたしは一の恋愛対象ではなく、母親の面影に過ぎないこと。じゃあ、好きだつて気付いても無駄なんだね。

カクテルを一気に飲み干した。阿部さんは、黙ってあたしのに見つぷり感心しながら、瞳は優しくそうに、見守るようにあたしを見ていた。

結局、あたしは一に会わずに帰っていった。



家に帰ってすぐにメールが入った。一だ。この時間は丁度バイトがあがった時間だろう。たぶん阿部さんからあたしがバイト先に行ったことを聞いて、連絡してくれたんだろうけど、メールを開ける気分にもなれず、あたしはベットに倒れ込んだ。

ショック。そして悲しくて寂しい。せつかく手に入れた気持ちだったけど、手放すしかないなんて悲しすぎる。こんなとき泣けたらいいんだけど、うまく涙も出てこなくてモヤモヤツとした気持ちばかりが気持ちを覆う。まるで雲のようだ。

しばらく布団にくるまっっている、チャイムを鳴らす音が聞こえた。携帯の時計を見ると一時を回っていた。考え事をしていたつもりが、いつの間にか寝てしまっていたらしい。それにしてもこの時間に人が訪ねてくるのはおかしい。

ドアのところに音もなく近付く。リズム良くならされるチャイムうるさいと思いながら、近付き外をのぞくと案の定、一が外に立っていた。思わず漏れたため息。チェーンを外さずにドアに隙間を開けながら一に声をかけた。

「近所迷惑・・・」

声のトーンであたしがどんな気持ちでいるのかくらい分かるだろうな。そう思いながらいつてやったけど、一はドアを外す気かと思うくらい力で持つて、あたしの顔を覗き込んできた。

「よかった！ メールかえってこないから、もう口きいてもらえないかと思った」

できることならそうしたかったんだけどね。

「遅くなっただけど、告白の返事するね。あたし、やっぱ」

と言いかけたとき、慌てるようにして一があたしの口を押さえた。「まずは、俺の話聞いてよ。阿部さんがアユさんに俺の彼女のこと話たんでしょ？」

じつと目を見つめて、うなずいた。

「彼女いるんでしょ？ それは認めるんだね。それだけでさ、分かるじゃん。あたしに言った告白なんて、本物じゃないんだって。本物じゃないものなんていらないもん。あたしは、浮気につきあう気にはなれない」

一は一瞬困った顔をしてから、頭をかいて俯いた。それから長いため息の後に、あたしの方を向き直った。

「彼女はいる。でももう付き合ってるのか分かんないんだよ。いつもそうなんだ。喧嘩したわけでもないのに急に連絡とれなくなつて、会いにいこうとしてもあいつ拒否ってるからどこにもいないんだ。そういう状況でさ、優しい人とか、アユさんみたいに惹かれてしまふ人に出会ったら好きにならずにいられない。初めは、一番はじめは本当に別れてたと思つてた。でもあいつは俺が他の女とつきあいはじめたつて聞くとすぐに、戻ってくる。そこで俺はいつも混乱するんだよ。どっちをとるとか、どっちが好きなのか、どっちと一緒にいたいのか。結局、選ぶのいつも彼女だよ。彼女は、俺を無理矢理にでも犯してしまうから、俺は拒めない」

今度はあたしがため息をついた。

「言い訳よそんなの。今まで、振つてきた女の子の気持ちを代弁してあんたのことなんかけちょうけちよんに貶してやりたいね。最低だよ。気持ちを利用して、自分だけ良かったらどうでもいいなんてあたしはそんな女の子たちと一緒になりたくない」

「今度は、アユさんへの気持ちは今までと違うんだよ。本気だし、離れたくない。今までの関係を崩すようなことしたくないし、先にも進みたい」

信じられない。どれもこれも、いい様に言葉をかえているようにしか聞こえない。捻くれているんじゃないんだ。はじめの気持ちを信用するモノがない。

「・・・彼女の名前、なんて言うの？」

一は驚いた顔をしたけど、すぐに真顔になった。

「・・・あゆみ」

今度はあたしが驚いた。よりによって同じ名前かよ。きつと美人ですごく、優しい人なんだろうな。

「今晚はかえつてよ。一はさ、きつとあゆみさんが傍にいないくて寂しいだけ。自分の中で答えは出てるよ。だから今日は帰って」

そう言つてドアを閉めようと手を動かした。でも力強い腕につかまれて、思うように動かさないまま、引き寄せられた。ドアの小さな隙間に一が顔を出す。そうするとあたしの肩口に当たつて、くすぐつたい。耳元に唇を寄せられて、あたしは何度も愛の言葉を耳にした。

仕方のないことだった。あたしは少し前にすきと気付いたばかりで、冷めるには遅すぎたし、恋の始まりつてやつは、その気持ちを盛り上げてしまうものだ。あたしにささやかれた言葉たちを、信じてしまいそうになる効力はあるのだ。

あたしはチェーンを開けて、一を中に入れた。それがどういふことを意味してるか分かっていた。期待だけはしないように言つたけど、一とあたしはベットのの中に入ってしまった。

だらしない女だ。いつもそう。流されてしまう。お酒も飲んでたし、いい気分だった。そういうのが積み重なつたとで後悔するのは自分なのに、なかなか反省しきれていない。

一の寝顔を見ながら、あたしはあゆみさんの事ばかり考えていた。会つてみたい。そして、その後は・・・

「こんにちわ」

そう声をかけてみると、首を傾げるようにしながら笑顔を向けてくる美しい女性。ピッタリな花屋という職場。クルクルのパーマでフンワリと可愛らしい髪型をしているのに、背丈と顔のきりっとした眉が美人という印象を与える。

一と並ぶと美男美女のようだと、思わず考えてしまった。

あたしの目の前にいる美女、それはあゆみさんだ。その彼女と出会うまでには、阿部さんの協力があつた。

なりゆきで寝てしまった朝、先に起きたのは一だったようだ。始発に乗れるように急いで家を出たらしい。玄関の靴が散らかっている。今日は学校はないし、特に用事はなかったが時計の針は八時を指していたので驚いた。せっかく朝早く起きたので、あたしは部屋の掃除をはじめて玄関に散らかった靴を片付けた。それから一息ついて朝食を食べると、携帯をいじりながらずっと考えていた。

どんな顔をしているんだろう。どんな声なんだろう。あたしとは違って、背も高いんだろうか。それともとっても可愛い、守ってあげたくなるような人だろうか。ずっと考えてる。あゆみさんという人のことを。あたしは、その人の彼氏である、一と寝てしまったのに。

気になるという感情は、嫉妬とかそういうのじゃない。一が好きになった人が、どうして一と一緒にいられなくなってしまったのに付き合っているといえるがどうしてなのか不思議なのだ。

ため息が漏れた。苦手のブラックのコーヒーを飲みながら目を覚まして、あたしは意を決して阿部さんにメールした。今は寝ている時間かもしれない。すぐに返ってこないだろうと思ったが、意外にもすぐに返事は来た。

あたしが送ったメールの内容は、亜由美さんについて教えてほしいということ。阿部さんは場所を指定して、あたしの家の近くにある喫茶店に誘った。あたしもそうだが、阿部さんもメールや電話で長話するのが面倒なのだろうと思った。会って話せるならそれはありがたいことだ。

「紅茶でもどうかな？」

「驕ってくれるなら、遠慮なくいただきたいですね」

了解。と阿部さんは店員を呼んでさっさと注文を済ませた。席について上着を脱ぐと、椅子の背もたれにかけた。こういう時、男の人の視線を気にするようになったのは、昔つきあってた人にその仕草が色つぽいと言われたからだ。今もちょっと意識してしまったが、阿部さんがあからさまにあたしの方を見ずに何か注文しようかな？といった感じで注文票を見ているので、へんに意識して恥ずかしくなった。

「話なんですけどね、やっぱり気になるんですよ。あゆみさんってどういう人なんですか？」

阿部さんは顔を上げてあたしを見た。

「名前、聞いたんだ。あいつには返事してやったの？」

「断ったつもりなんですけど、多分伝わってないですね」

昨日の調子だと、逆にうぬばれているかもしれない。阿部さんはため息をついた。

「あいつもシヨウモナイやつだよな。あゆみってさ、俺の幼なじみなんだよ。一とあゆみを引き会わせたのは俺でさ、つきあえるようにしてやったのも俺。どっちからって事もなかったよ。あゆみも、一もお互いに同じ時間の中で好きになって、いつの間にか恋に発展してたんだと思うよ」

。それは些細な変化で、誰も二人がつきあってるなんて思ってた。でも一の子供っぽくて、母親に甘えるような仕草にさ、あゆみは一を手放せなくなっていったんだよ。でも、一はそうじゃなかった」

阿部さんはお絞りで手を拭いた。

「一の家族のこと知ってる？」

その時に気付いたけど、あたしは一と家族の話なんてたまに軽く口にするくらいで、たいして話したことがなかった。首を振ると、阿部さんはだろうな、という顔をした。

店員がやってきてあたしに紅茶を、阿部さんにはカプチーノをおいた。そして阿部さんは話をはじめた。

「母親がいなくて前話したけどさ、家が結構厳しくて、母親が亡くなった後すぐに一の父親は再婚して、新しい母親を連れてきたけどその人は一に冷たくて、だんだん家族から遠のいていったんだ。そんな時にさ、年上で母親のように優しい愛で一に接する女性が現れたら、恋をしてしまうのは当然のことだと思うよ。でも一はあくまで母親の愛を求めているだけ。そうだと思うだろう？あゆみは母親のように、深い愛でつなぎ止めておくことができると思ってるから、浮気だって簡単になってしまう。離れていくのは、一なのかあゆみなのか、長年付き合いの長い俺も分からなくなるよ。でも分かるのは一の持つてる愛とか恋とかいうものは、偽りのようなもの。歩みに対するものが、一番本物っぽいんだ。だから傷付く前に離れるべきだって、話しただろう？」

そういう話をしていた。あたしはその話を聞いて、ショックで一瞬恋が冷めてしまいそうになったけど、結局そんなことにならなかった。それはどこかで同情していたのかもしれない。あたしと同じように死んでしまった人の面影を求めてしまうところ。

寂しいだけとはいえ、それは人を傷つけてしまう行為だ。あたしはそれを身を以て経験したんだな。

「そっか。そうなんだ。阿部さんのいいたいことは分かりましたよ。でも、あたしあゆみさんがどうしたいのか分からないな。あゆみさんは・・・あゆみさんもきつと、一に対して似たような感情を持ってるんじゃない？まるで子を持つ母親の気持ちになっているだけなんじゃ」

そう考えると、手放せなくなるだろうし、一の浮気に対しても別れという結果を出さない心理も少しは理解できる。それに対しての阿部さんの返事は、同感するものだった。どうやら同じ考えに行き着いてるらしい。

「あたし、亜由美さんに会ってみたいな」

思わず口にした。阿部さんは携帯をおもむろに取り出すと、あたしの方をちらつと見た。

「会ってみる？　ここからそんなに遠くないとこにいるはずだけど」  
あたしは満面の笑みを作ると、頭を下げた。

「是非、お願いします」

阿部さんは口元を微笑ませた。

そういった経緯を経て、あたしは今あゆみさんの働く店にやってきた。たぶんもうすぐ彼女はお昼休憩になるはず。時間を計算してきたから間違いなかった。店から出てきた女性は、見間違えることなく、あゆみさんだ。阿部さんの携帯に写ってる姿よりも、もっと美しい。

「こんにちわ」

声をかけると、誰だっただろうと不思議そうに首を傾げた。

「あたし阿部さんの知り合いなんですけど、これからお昼どうですか？」

いきなり知らない人間にお昼を誘われるなんて、不信に思うだろう。でも彼女はにつこり微笑むと、ぜひ、と言った。阿部さんの知り合いだというのが、彼女の不信感を取り払ったのかもしれない。彼女の花屋は小さくて、でもとっても可愛い雰囲気があった。そこから少し離れた場所に、お昼を軽くとれるようなカフェがあってそこに彼女はつれていってくれた。

「阿部って、尚のことよね？　あいつの知り合いってことは、彼女なの？」

あゆみさんはレモンティーを飲みながらフワフワする笑顔向け

てそういった。

「まさか。違います。っていうか、あたし阿部さんの知り合いでもあるんですけど、一の知り合いでもあるんです」

目の前のあゆみさんはレモンティーを机におく前に少しだけ止まった。それからため息をつくように息を吐き出した。

「なるほどね。一の知り合いってことは、また浮気でもしてるの？慣れっこ。といった感じであゆみさんは視線を落としたまま、あたしの顔を見ようとしなかった。

「してないとは言いい切れないですけど、心の浮気は、してないですよ。あたし、あゆみさんに聞きたいことがあるんです」

「一のことをどう思ってるか？」

あたしは聞こうとしている言葉を先に言われて、何もいえず口をつぐんだ。

「そうでしょ？ はあ。またね。彼ね、いつもそうなのよ。浮気するじゃない、それであたしのこと知られるじゃない、そうだったらあなたみたいに彼女たちはあたしにそう聞きにくるのよ。それでその時、どうやってあたしのとこまで来たのかって聞いたらね、尚に聞いたっていつも言うの。あなた、あの二人に遊ばれてるわ。どの女もそうだった。あたしがその子たちを見てどう思ってるか分かる？ 同情以上に、かわいそうだと思うわ」

そこでようやくあゆみさんはあたしの顔を見た。その瞳には確かに同情してあげようかという、寂しげな瞳があった。あたしは急に恥ずかしくなって、顔をうつむかせたままお茶を飲んだ。

「もうやめるわ。あなたみたいに可愛いお嬢さんが、一に恋したために傷付けらるなんて見てられないものね。それに、もううんざりしてるし」

言い方がまさにうざったい。という感じ。

「迷惑でしたね。こんなとこまで来ちゃって」

「まあ、正直そうね。あなたは私にそんなこと聞いて、どうするつもりだったの？ 別れてくれて、言うつもりだった？ それなら



望みはかなったわね」

皮肉たつぷりにいわれてしまった。でもあゆみさんはまだ笑ったままで、あたしに対して怒っている風に見えなかった。

「・・・わたしは、どうして欲しいと思ったか分かりません。でも聞かなきゃならないと思ってただけです。・・・たぶん、一の傍にいてあげてほしいと思ってたかもしれない。一を見てたら分かるんです。あたしもそうだから」

彼女は形の整った眉を動かした。

「分かるって？ どういうこと？ 一は母親に依存してるのよ？

そんな彼の気持ち、あなたは分かるの？」

「ええ。あたしも一みたいに父親に依存した恋愛しかできなかったから」

あゆみさんはなるほど。とため息まじりに呟いた。

「私は、一を必要としていないわけじゃない。でも、一はあたしを必要としないの。それがどれだけ寂しいことか分かる？ あたし自身を見てほしいのに、彼が望むのは母としてのあたし。そんな恋愛、悲しい。だからあたしは離れてやるのよ。一から離れて、一に教えてやるの。あたししか傍にいないんだって。あたししか必要じゃないはずだって。でも離れてしまうと、本当に必要としてるのはあたしだって気付くわ。そして一は違う人に恋をしてる。そんなの苦しいじゃない。だからもうやめる」

ずっと寂しい思いをしてきた、あゆみさんは涙を堪えるように鼻をすすった。でもあたしは納得してなかった。そりゃ、あたしにも寂しい思いをした経験はあるし、させていたという事に気付いたけど、あゆみさんと同じように一だってあゆみさんを必要としてるはずだ。そんな二人が離れたままになっていいはずがない。

あたしは紅茶を飲み干すと、あゆみさんを睨むように見た。

「あたし、一に言います。あゆみさんの所に行くようにいいます。だから、話してやって下さい。きっとあなたの気持ちを分かってくれると思うんです」

こんな美しい人を泣かせてはいけない。あゆみさんが何かをいう前に、あたしはお金を払って店を出た。出る前を見た、困った顔をしたあゆみさんのこと、あたしは忘れないだろう。

返事は打った。待っている、と期待させるような文を。でもあ  
しが気を許したのは、一にもう一度あゆみさんと話をしてもらっ  
う説得するためだ。

三十分程すると一がやってきた。手には熱々のあんまんがあつた。なんとなく食べたくなつたらしい。

部屋にあがらせて、ソファーに座るように促すとお茶を用意した座っている間一は、新聞を見たりしながらくつろいでいた。すでにあたしの部屋になじんでしまっているように見える。このまま手放すのも惜しい。でも、そういうわけにはいかない。あたしは首を振るとお茶を出した。

「あんまん、久しぶりだな」

手に持つと既に冷えたあんまんは皮がパリパリしていた。

「でもおいしいよ。アユさん甘いの好きでしょ？」

まあ、嫌いじゃないかな。

「あたしに大事な話があるんだ」

一の動きが止まつて、あたしの顔を真剣なまなざしで見つめた。それから、何？ と首を傾げた。そんな顔をするので、少し笑った。後あたしは一の手を握った。

「今日、あゆみさんに会ってきた」

息をのむような緊張した音が伝わってきた。

「あゆみさんって、素敵な人ね。美人だし、とっても優しそうな人だし大人って感じがする。話したのよ。いろいろ、一のことでもいい聞いた。それで分かっちゃたんだよ。あんたは、亜由美さんのことが好きだよきっと。だから、会いにいってみて。そうすれば全

部、わかるよ」

啞然としてあたしの顔を見る一の手に、紙を無理矢理握らせた。そこにはあたしが書いたあゆみさんの店までの地図が載ってる。以前に居場所を知らないといっていたから、書いておいたのだ。一は戸惑うように紙を見つめて開いた。でもすぐにぎゅっと握った。

「無理だよ。もう終わってるんだ」

「終わってない。あゆみさんと話したら分かるよ。寂しいなら、彼女のところに行くべきなのよ。明日、バイト休みだっけ？」

「休みじゃないけど・・・昼まで空いてる」

「じゃあ、十分よ。行つてきなさい。ね？」

納得いかない顔をしている。そりやそうか。心の中は今きつと、ぐちゃぐちゃになってるんだろう。でもそれは自業自得というやつだ。無意識にとは言え、いろんな女を傷つけて、今はあたしを巻き込んで。そんなやつにはお仕置きが必要なんだ。

一は鞆を持つて玄関に向かいはじめた。せつかく入れたお茶には手を付けていない。

「とりあえず、帰ってから考える。アユさんにこんなこと言われるなんて思つてなかったから、ちょっとびっくりした。じゃあ」

笑つて、手を振った。自然な行為。でもこれが最後になるような気がして、あたしは笑顔を作れなかった。扉が閉まると、あたしはなんだか離れていく一を止めなくて良かったのかという、後悔をしていた。

それでもこれで良かったという、達成感に似た気持ち湧いてきたので、なんだか気分が良かった。このままあゆみさんと上手くいけばいいのにな。本気の恋をしていたけど、一にとって幸せな気持ちになれる道を選んでほしい。

それから、一には会わない日々が続いた。メールもしなかったし、電話もない。阿部さんと会うようなこともなくなってしまうて、もう二度と会うことはないと思つた。それはきつと一があゆみさんと

上手くいったからだと思う。それなら、あたしは一との出会いを思い出に変えて、次の恋でもしよう。なんて楽天的に考えていたころ、あたしは再び一に出会ってしまうのだ。

それは会わなくなってからすでに一年が過ぎていた。

バレンタインデー。今まではこの時期に彼氏と別れていたあたしだったけど、今年はその彼氏すらおらず寂しいバレンタインデーになるなあ、と思っていた。就職が決まってすぐに引越した場所は以前とは全く違う町。窓からはビルからの光が、あたしを祝福しているようでロマンチック。バレンタインデーに祝福される様なことは何もないんだけどね。

その夜に、玄関をたたく音が聞こえた。慌てて出ていくと、まずは大きなぬいぐるみを渡された。キラ物のでっかいやつ。びっくりしながら受け取ると、その後ろから一が顔を出した。まさかの登場に驚いたあたしは、何もいえず目を見開いたまま見つめていた。「ハッピーバレンタインデー。知ってる？ バレンタインデーって、外国では男の人が女の人にチョコを渡すことがあるんだって」知ってる。っていうかそんな話を聞いている場合じゃないよ。

「なんで、ここ知ってるの？」

髪の毛の色が明るくなって、二つほどピアスの数が増えている。それから髪は短くなって、顔つきもかわった。一年見てないだけで、こんなに変わってしまうもんなんだ。

「アユさんの友達に聞いた。なつみさんだっけ？ そこまで一緒だったんだけど、帰っちゃった」

笑った顔は子供ばい。あたしもつられて笑った。

「あたしなんかの所に来てていいの？」

「うん」

「本当に、いいの？ 浮気ならごめんだからね」

「わかってる」

「ちゃんと分かってるの？ ま、浮気ならいつか分かるか」

「そういうこと。それにアユさんが手を離さないでいてくれれば、

大丈夫」

人任せかよ。あたしはにっこり笑って、大きなぬいぐるみを玄関に投げて、一に飛びついた。それから家に入れて、ドアを閉め、ゆっくり抱擁しあった。

「あゆみさんとは、別れっちゃったんだ・・・よね？」

「うん。ちゃんとけじめつけて来た」

「なんであたしなんか選んだの？」

これはちよつと恥ずかしい台詞だな。あたしは一の肩口に鼻先を押し付けた。

「アユさんは、甘えたいとおもっけど、あゆみとは違って弱いところを見せて俺に甘えようとするじゃん。だから、上手くいくと思っただ。お互いに求めあうことって、それを理解しあうのって難しいけど、恋人じゃなくてもそれができたんだから、アユさんとなら続けられると思った。だから、好きになっただ」

なるほど。あたしもそれに近いかな。

ゆっくりと一から体をはなすと顔を上げて緩んだ顔のまま笑った。二人で小さく笑いあうと、額をぶつけあって、しばらくお互いの存在を感じていた。

「あ、そうだ。チョコレートケーキあるんだ。丁度いいし食べようよ」

「うん」

部屋の中に招き入れる。

こうした時間が好きだった。一緒にご飯を食べて、おいしそうに食べる姿とかを見るのが楽しい。また、そうやって一とつき合っていけるんだね。はっきりと言葉にはしなかったけど、あたしは心の中で何度も、一に気持ちを伝えていた。

好きだよ。ってね。

## 8（後書き）

本当はバレンタインデーまでに終わらせる一話完結の短編にしよう  
と思っていましたが、力不足で話がどんどんふくれあがり、まとめ  
ることができずこんなに長くなってしまいました。しかも更新が遅  
いので、損で下さっている方には迷惑をおかけしました。  
最後まで読んで下さってありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3857a/>

---

年上の女と年下の男

2010年10月8日15時49分発行